

世界と日本2020

堀内 修

経済以上に文化の世界化が進んでいる。そしてオペラはその先鋒……のはずだった。ヨーロッパやアメリカから歌手や指揮者や演出家がやってきて日本のオペラ上演に参加し、日本の歌手や指揮者や演出家がヨーロッパやアメリカの歌劇場の公演に参加する。人だけではなくて歌劇場まるごとの引越し公演も、珍しくなくなっていた。もはや日本やイタリア、ドイツやフランスなどと国にわけて考えなくてもいいくらいに、オペラの世界化が進行していた。

それが突然変った。人の交流が止まり、オペラの公演が中止される危機が起った。

1月に京都と横浜で《サイレンス》が上演された時は、2020年のオペラはいつも以上に豊作なのではないかと予想された。川端康成の短編小説「無言」のオペラ化で、映画音楽で知られるアレクサンドル・デスブラが作曲し、デスブラとソルレイがフランス語の台本を書いた《サイレンス》は、デスブラ自身が指揮し、少数の歌手と少数のアンサンブル・ルシリンによって上演された。ルクセンブルクとパリのあとが京都と横浜だったのだから、新しい作品だ。たった2回の上演だったが、新作としての注目度は高かった。映像を巧みに使用した舞台と、精緻な演奏によって、この上演は成功を収め、評判も上々だった。これが最初なら、この後に続く海外の歌劇場の公演はきっとすばらしいものになる。なんと幸先の良い2020年と、聴いたオペラ・ファンは思ったはずだ。だが、実際は違っていた。《サイレンス》は2020年唯一の、外国からやってくるオペラになってしまった。何十年かぶりの事態だが、そんな年を数える気に

もならない。

春を迎える前に、コロナが襲った世界の変容が明らかになっていた。海外の歌劇場の日本公演はつぎつぎ中止になる。外国からやってくるはずの指揮者や歌手が来日を中止し、日本の演奏家に交替するか、さもなければ中止になった。

それでもなんとか上演される日本のオペラはましだった。海外から伝えられる歌劇場の活動中止の報は連日で、延期と閉鎖があつという間に広まった。ドイツの歌劇場は全面的に閉じられ、ウィーンやイタリアの歌劇場、ロンドンやスペインの歌劇場など、オペラの公演が連鎖的に止まっていった。夏が近づくと、各地の音楽祭の中止が発表されていった。ミュンヘン・オペラ祭もバイロイト音楽祭も、ルツェルン音楽祭もエクス・アン・プロヴァンス音楽祭も、というように挙げていくとキリがない。ベルガモ・ドニゼッティ・オペラ祭やエディンバラ音楽祭なども、中止されるか一部のコンサートが無観客にして配信するだけになった。各都市がロック・ダウンを行ない、行き来が自由になっていたはずのEUでさえ、国境を復活させ、往来を制限したのだから、音楽祭の開催は難しかった。

だがそんな中で果敢に開催を試みた音楽祭もあった。ザルツブルク音楽祭は規模を縮小して開催し、オペラの上演も行なわれた。ただし本格的なオペラは2つだけで、《エレクトラ》と《コシ・ファン・トゥッテ》だった。どういうわけか、日本でも欧米でも、危機のさなかに多くの悪条件を抱えた上演の中に、とびきり質の高い上演があったのだが、その最たるものが《コシ・ファン・トゥッテ》だっ

た。祝祭大劇場で行なわれたのだが、満員にはできず、定員のほぼ半分の1000人を入れ、しかもきちんと休憩をとるわけにはいかないので、かなりの短縮版にせざるを得ない上演だった。さらに指揮者のヨアナ・マルヴィッツはまだ若い、この音楽祭に初めて登場した人で、舞台も人と人との間隔を置かなければならないので、舞台上演とはいえ、かなり簡略化されていた。ところがこの簡潔なモーツァルトの上演の質は非常に高く、これまでのどの公演にも負けない生氣あふれるものだと評価された。指揮者は名声を確立し、公演は世界中に配信されて評判になった。もちろんザルツブルクの音楽祭もこの《コシ・ファン・トゥッテ》の公演も例外中の例外で、ほとんどの音楽祭と歌劇場はこのころ沈黙を余儀なくされていた。

■ マスクと無観客、ソーシャル・ディスタンスと歓声の禁止

パンデミックが続くにつれて、オペラの世界ではそれまで想像もできなかったことが起った。終わった後は次第に元に戻るだろうと思われるが、もう完全に元通りにはならないはずだ。どうなるのかは、いまのところわからない。

もちろんマスクやフェイス・シールドは、終わった後は少なくとも欧米では消えていくに違いない。だが世界中の劇場で、歌手さえもがこのような感染防止の器具を身につけることになるとは思ってもよらなかった。そしてこの「衣裳」が日常化してみると、オペラにおいて、もしかしたら消え去っていかうとしている習慣が明確になった。

最も怖れるべきは笑顔の喪失かもしれない。人々は歌劇場で笑顔を交わしていた。おりたカーテンの前に出てきた歌手たちは会場に笑顔を送り、観客は笑顔で迎える。坐って

いる人に立ってもらって自分の席へと向かう時、挨拶の言葉以上に大切なのは笑顔だった。それが消えた。

人のふれ合いはもちろん、近づくことさえソーシャル・ディスタンスを守る必要から、難しくなった。客席でのソーシャル・ディスタンスはまだしも、舞台上のソーシャル・ディスタンスとなると、オペラの場合は悲劇を喜劇に変えかねなくなる。ロドルフォとミミが距離を置いたまま愛の歌を歌い、ホセがカルメンに近づけないまま殺人が済んでしまったりするからだ。

オペラの歴史が始まって以来、歌劇場の楽しみは舞台だけではなく、幕間に、人は軽く食事をしたり、飲みものを楽しんだ。シャンパンもワインも、コーヒーや炭酸飲料でさえ、劇場でこそ味わうものだと思われてきた。そして幕間といえば会話だ。その会話を、コロナは奪った。ずっと閉鎖されていたわけではなく、オーストリアやスペインの劇場は、感染状況が少し収まった時に、劇場を再開させてもいたのだが、食事や酒だけでなく、会話も、まったく禁止されないまでも、楽しむことができなくなっていた。

もしもこの悲惨な状況を肯定的にとらえるなら、それはこの数々の不自由によって、オペラという芸術の社会的な性格がはっきりとしてきたことだろう。ドイツでフランスで、イタリアでイギリスで、オペラはただの気晴らしや娯楽でないのが、次第に共通の理解になっていった。

進行していたオペラの世界化が、国境を越えての人の移動が難しくなることで、一気に逆行してしまったのも大きな変化だった。NHK イタリア歌劇団からベルリン・ドイツ・オペラ日本公演、そしてミラノ・スカラ座やウィーン国立歌劇場など名だたる世界の歌劇場が毎年のように、いや年にいくつも、日本でオペラを上演するようになった何十年

かの過去が、突然止ってしまった。外国の歌劇場の日本公演だけではない。世界中のオペラ活動の交流が止った。オペラの世界から消えようとしていた国境が、再び強固な壁や手続きとともによみがえった。

■ さまざまな試み

春のコロナ・ショックのすぐ後から、各地の歌劇場はこの打撃を和らげるための、あるいは脱出するための、あるいは逆手にとってオペラの世界を豊かにするための、試みを模索するようになっていた。

ソーシャル・ディスタンスを受け入れ、マスクやフェイス・シールドを受け入れ、あれこれの制約を受け入れて、オペラの公演が行なわれるようになった。観客の数を制限するのはいい方で、欧米の歌劇場のほとんどが、感染状況が厳しい時には無観客にして、なんとかオペラの上演を行なおうとしていた。

たとえばローマ歌劇場は、夏に新しい上演を始めた。歌劇場でなく、ボルゲーゼ公園にあるシエナ広場を使つての上演だった。確かに、感染防止のためには閉鎖された空間よりも野外がいい。とはいえ音響的にも演技や歌の点でも問題は多い。だが演奏でも演出でも、広々とした空間を《リゴレット》というオペラの内容に結びつけた上演は、すべてが成功を収めたわけではないにしろ、コロナ禍での上演への挑戦にはなっていた。その判断は無論映像を通してのものだが、この映像用オペラは、次第にオペラ上演に新しい意味を持ってくる。

これまでも歌劇場を出て、別の場所に舞台を移しての上演を、映像として収録そして放送する試みは行なわれてきている。チューリヒの歌劇場が《椿姫》を普通に活動しているチューリヒ中央駅で、通り過ぎたり、立ち止って歌う歌手たちを見物したりする人々の

あいだで上演し、話題になったこともある。またザルツブルク音楽祭ではザルツブルクの空港を舞台にしての上演を行なっている。それらは珍しい、そして新奇な試みとして、ある程度の成功を収めている。だが2020年には歌劇場を離れての上演が、別の意味を持ってきた。これは翌2021年になってからだが、ローマ歌劇場は、無観客上演を、歌劇場そのものを舞台にしてくり広げる《椿姫》の興味深い上演も試みている。

どういうわけかこれまでとは違うオペラの上演方法を試みるのは、イタリアの劇場が積極的だった。ナポリ・サン・カルロ劇場でのいくつかの公演もあるが、より明解だったのは、ミラノ・スカラ座の2020年12月の、オープニング公演だった。無観客で、しかもオペラではなく、スター歌手たちを集めての名場面集だったのだが、一場面ごとに工夫が凝らされていた。スカラ座なので出演したのは時代を代表する一流の歌手たちで、それぞれの歌が大変優れていたのだが、それにも増して一流だったのは歌の見せ方、場面の見せ方だった。こちらで世界中の人は現代においてもというだけでなく、コロナの時代にあっても、スカラ座が世界に冠たる歌劇場であることを実感することになった。

しかしなぜ無観客なのに世界中なのかといえば、無論このスカラ座オープニング公演が映像によって世界中に公開されたからだ。コロナがオペラとオペラの劇場に及ぼした害は大変大きく、その被害がどのような性質で、どれほどの規模だったのかを、つらい気持ちで振り返り、検証するのには、おそらく何年もかかるだろう。だがすべてが悲惨だったわけではない。中には認めるべき変化だってある。その最たるものが、オペラの映像化とその配信の進化だろう。

■ 映像の配信

オペラの上演を映像化する試みはかなり早くから行なわれている。無声映画の時代から、当然作品まるごとではないにせよ、オペラの映像化は試みられている。20世紀の半ばにはザルツブルクでの《ドン・ジョヴァンニ》や《ばらの騎士》が映像化されている。テレビ放送ならNHKによるNHKイタリア歌劇団がよく知られている。最近ではメトロポリタン・オペラや英国ロイヤル・オペラなどが積極的にオペラ上演を映像化して、映画館で上映したりテレビ放映を行なうなどしていた。しかし2020年春からの、都市のロック・ダウンや劇場の閉鎖は、この映像の重要性を格段に高めることになった。

春、公演の中止が相次いだ後、というより公演の中止をそのまま映像の収録と配信につなげる例がいくつも起った。公演は中止されても、リハーサルは進行していて、観客のいないまま上演を行ない、それを映像化するのが、日本だけでなく、各地の歌劇場や音楽祭で実行された。

公演中止が続いたところで始まったのが、過去の公演の映像の、ネットでの配信やテレビ放映だった。メトロポリタン・オペラはもちろん、ミラノ・スカラ座やウィーン国立歌劇場など、これまでの公演の映像をたくわえていた一流歌劇場が、いわば活動の証しとして、過去の映像の公開を始めた。これは歌劇場に行けなくなったミラノやウィーンやニューヨークの人たちだけでなく、オペラを聴く機会を奪われた世界中のオペラ・ファンに歓迎された。

だが春には、まだ回復の希望があった。歌劇場はつぎつぎに2020/2021シーズンのプランを発表する。夏の音楽祭も、バイロイトやエディンバラ、ミュンヘンやグラインドボーンと、次々に中止されたのだが、秋には

きっと回復する、なんとかコロナが収束して欲しいという希望的観測のもとに、次のシーズンの内容が発表されていった。

発表されただけでなく、実際に公演も行なわれた。少数の聴衆を入れ、歌手は人との距離をとり、オーケストラや指揮者はマスクを付けるなどして、再開を果そうとした歌劇場もあった。しかし、たとえばボリショイ劇場は、《ドン・カルロ》のエリザベッタを歌うアンナ・ネトレプコがコロナに感染し、公演が続けられなくなり、ほかの歌劇場も感染が拡大し、町が、あるいは国全体がロック・ダウンする中で、公演継続あるいはシーズン開始が不可能になっていった。メトロポリタン・オペラは9月の段階で2020/2021シーズンの予定をすべてキャンセルしてしまった。

通常通りの公演ができなくなった歌劇場が行なうようになったのが無観客上演だった。無観客というのは歌劇場でのオペラの上演を観客なしで行なう意味だが、これは「ストーリーミング配信」を前提にしている。歌手や演奏家への制約は、国によって、あるいは時期によって変る。マスクを付けたり、人々との距離をとったりするが、上演は映像化され、それが主にインターネットを通じて配信される。歌劇場によっては有料にするところも、また期間を限るところもあるが、いずれにしろ世界中の人が、求めればその公演を自宅で聴けるようになっていった。

聴く側だけではない。上演方法とそして映像が大きく変る。歌手同士の距離の問題が生まれたが、そのかわりに歌う場所が舞台に限定されなくなった。声も客席ではなく、マイクを通して彼方の人々に届けることになる。演技だって、肝心なのは映像だから、こまかさが必要になるし、顔の表情も大切になる。もう何十年も上演における演劇的な面が強くなっていたオペラだが、ここでさらに演劇あるいは映画的な面が強まることになっ

た。当然演出家の仕事が変わり、大切さを増す。増したのは大切さだけでない。客席に客がいないのだから、カメラの設置できる範囲は広がり、撮影するやり方も変えられるようになった。演出の自由度が増して、ゆっくりとだが、ストリーミング用のオペラ上演の質が変わっていくことになった。

無論マイナス面も大きい。かつて共に作る役割りを果していた観客がいなくなれば、その反応に応じて歌い、演技し、演奏することができない。確かに大勢の人が世界中で聴いているはずなのだが、歌う者がその反応を感じとることはできない。演出家でさえ、終演後の観客の喜びや怒りを目のあたりにできないわけだ。

完全な無観客だけでなく、半分あるいはもっと少なく、観客を制限した上演も行なわれた。収束に向っているのではないかという時期には増えたのだが、コロナの次の波でまた無観客になり、時には完全に中止されたりもする。多少でも観客がいるほうがずっとましではあるものの、つらさを増すこともあり得る。せっかくオペラを堪能しようという客がいるというのに、その客はマスクをして表情がわからないだけでなく、「ブラボー！」やら「プー！」やら声で意志表示するのを禁じられているからだ。なんとか拍手だけはできるものの、喜びの声も怒りの声も出せない無

表情の観客を、オペラを共に作る者として、歌ったり演奏したりする者が感じられないとしても無理はない。

しかし、再開と中止をくり返ししながら、歌劇場や音楽祭はストリーミングによってその活動を世界に伝え続けた。上演を完全に中止し、過去の映像だけを流すほかない歌劇場もあったが、多くの歌劇場は極端に数は減ったし、演奏会形式や歌手のリサイタル程度しかできない時期はあったが、なんとかオペラ上演のストリーミングを行ない、映像を世界に届けて、その存在を示した。

スカラ座が特別コンサートを流すと、ナポリのサン・カルロ劇場も12月に《カヴァレリア・ルスティカーナ》の映像を流した。オーケストラの多くや合唱団はマスクをしていて、観客席に人はいない。ほとんどコンサート形式だったが、スター歌手が歌う上演の質は高く、上演しているサン・カルロ劇場の美しさも際立っていた。世界にとって、オペラにとって、途方もない災厄に見舞われた2020年だったが、世界のオペラが沈黙していたわけではなかった。

国を越える人の交流が大きく損なわれ、海外公演も完全にできなくなってしまった2020年だった。しかし映像化やストリーミングが、奇妙なオペラの世界化をもたらしもした。